

ヴェルサイユ宮殿鏡の間  
—ドーマー窓を中心とした設計プロセスの再検討—

米村 友希 慶應義塾大学

ヴェルサイユ宮殿鏡の間 (Galerie des Glaces, 1678-82 建設) はフランス王ルイ 14 世 (Louis XIV, 在位 1643-1715) の建築家ジュール・アルドゥアン＝マンサール (Jules Hardouin-Mansart, 1646-1708) の代表作である。その設計に関する文書史料は残っていないが、数種類の現存する図面からそのプロセスを推測できる。先行研究は特に断面図中の装飾やヴォールトの形態の変化に注目し、装飾の象徴性や採光条件の重要性を指摘してきたが、技術的・構造的な分析に乏しかった。特に、フランス窓の寸法表記とドーマー窓 (英 dormer window ; 仏 lucarne) の様々な変更への言及は稀であり、分析の余地が残されている。これまで施主たちの意思が設計に反映されている面が強調される傾向にあったが、その分析の結果、建築家が施主たちの多様な意思をまとめながらも、自身の考えを一つの建築物に実現させていたことが理解される。フランス窓の寸法表記とドーマー窓の分析により従来の設計プロセスに関する議論を具体性をもって補完し、同時に、意匠への配慮や技術・構造面での建築家の高い専門性を明らかにしたい。本発表の意図は、図面の分析を通じて彼の建築家としての役割を再評価することである。

フランス窓について、プロポーションやデザインの異なる複数の案には、ルイ 14 世と建築総監コルベール (Jean-Baptiste Colbert, 1619-83) のそれぞれの意向に合致する形態が含まれている。その寸法表記に注目すると整数比のプロポーションを持つ案が美的な形態として新たに考案されていることがわかる。また、一連の断面図を再検討することによってヴォールトと連動してドーマー窓の導入が検討されていることが読みとれる。壁体上部にうがたれるドーマー窓は、天井画への採光のために設置が計画されていた。逆光を防ぐために間接光としての導入が検討され、その効果を増すために壁面構成まで変更されたのである。図面にはプロポーションの重視、効果的な開口部を作り出す技術、全体的な構造への配慮が表れている。つまり、アルドゥアン＝マンサールは施主の専門外からの要望に単に忠実だっただけでなく、建築家として従うべき意匠・技術・構造といった建築固有の必然性にも忠実だった。

アルドゥアン＝マンサールは専門性をもって王に仕える宮廷の技術官であった。たしかに、宮廷において爵位や官職を得ることで地位を確立していった絶対王政期の宮廷人の側面を持っている。しかし、表面的な追従ではなく実質を伴う技量によって王と建築総監の信頼を得ていた。つまり近代的な技術者の側面も持っていたのである。彼らが望む空間を造りあげる卓越した専門性を有していたからこそ、彼はルイ 14 世の寵臣として宮廷で活躍できた。鏡の間におけるドーマー窓の計画には、近代的な技術者が持つ専門分野固有の思考と、社会的環境からの要請を両立させた優れたモデルが見いだせることを立証する。

(よねむら・ゆき)